

## 寺町散歩（7） 醫王山遍照院延命寺

史談会幹事 村崎春樹

延命寺は、北側を興福寺に、南側は長照寺に接し、後には風頭山を背負い後山の墓地が在る。山門は寺町通り



に向いている。この山門と本堂は長い石段によってつながっている。この延命寺の始りは、元和の頃に備前岡山の真言僧龍宣が中糺屋町の倉吉氏方を拠点に布教を行った。時の長崎は吉利支丹が盛んであって布教は困難を極めたが、多くの信徒を得て、今の延命寺の場所に一寺を創建したが寺号は無かった。また本尊は薬師

如来であった。この薬師如来には、次のような言い伝えがある、龍宣の故郷岡山に薬師院と云う寺があり、夜更けてその寺の院主が曼荼羅秘法修行中に堂の外に声があったが、院主は気にも留めなくて修行を続けたが、翌朝堂外に長30センチ余の美しい薬師如来様が置いて在った。院主は大変驚き、これを堂上に安置した。龍宣は、これを院主に懇願して長崎に携えて来たと伝えている。

龍宣が一寺を創建して間もない元和2年(1616)の4月～8月にかけて疫病が流行したが龍宣は、疫病退散を薬師如来に祈ったところ流行が止んだ事が評判になり長崎奉行長谷川権



六は、総町安全、港繁栄海上安穩の祈願寺とした。このため、元禄2年(1689)頃より総町から毎年祈祷料として箇所持町人からは一ヶ所につき銀八分五厘、借屋からは一匁銀一分五厘、総額四貫五百目を収納するのが恒例だった。また唐船海上往返祈願初穂料として唐船一艘に白銀一枚を奉納されたが、元禄2年(1689)から白銀二両ずつとなった。寛永3年(1626)京都仁和寺の末寺として遍照院と称する。慶安4年(1651)長崎奉行黒川與兵衛と馬場三郎左衛門の連名にて地子銀免除と朱印地同格



の格式を与えられた。享保3年(1718)豊後竹田藩主は延命寺を長崎警備の際の宿陣地とし以後藩士等が長崎に来訪時は延命寺に止宿した。同寺の境内は山門、健康観音、長崎四国三十三番霊場、石門、本堂、庫裡と書院、手洗場、地藏堂、法華三昧塔、報恩堂並びに靈安堂、華嚴塔、稻妻稻荷社などが在る。山門は木造瓦葺単層切妻造りの建物で明治

40年(1907)に建てたもので門の扉は、明暦3年(1657)同寺山門創建の時、長崎奉行所立山役所の大門の扉を下賜されものである。山門脇には昭和26年に同6年から25年まで毎日参詣する事で健康になった事を感謝して寄贈された健康観音と長崎四国三十三番霊場の平屋瓦葺がある。山門から続く長い石段を登ると、昭和33年(1958)3月築の石門が在る。正面頭部には、小曾根乾堂の長男である星海の筆になる醫王山の3文字が刻んである。本堂は創建以来数度に渡り建て直されており現本堂は、平成15年(2003)に解体改築されて全体に一新されている。本堂内は正面に本尊薬師如来木座像が在り左右に十二神将と元大徳寺山門にあった日天、月天を配し、本尊の前面には鏡一面を安置してある。他には、元経藏内にあった元禄12年(1699)肥前国松浦郡に漂着したと伝えられる釋迦如来木座像が左脇間に安置されている。また、右脇間には愛染明王座像と脇立として聖観音菩薩と十二面観音菩薩がある。また内陣右側には旧能仁寺猪ノ子弁財天と同寺伝来の弁財天が安置されている。同寺境内の配置は、大正から昭和初めにかけて編纂された『長崎市史地誌編』にある同寺境内の配置とは大きく異っている。これは平成15年(2003)の本堂改築に伴い、本堂周辺の整理を行った事による。延命寺の特色としては、同寺内に明和2年(1765)に創建され同寺鎮守として祀られていたが、明治4年(1871)他所に移され明治21年(1888)に再建されたと云われている。同寺後山には、文化8年(1808)正月16日夜旧大村藩士片山清七によって殺害された同寺住持権僧正の猛雄(元大村藩士小林宇右衛門で同藩同僚の妻と密通し、その夫に傷を負せて脱藩したが、同藩士片山主膳と延光寺住持の哀願にて仏門に入り、一命を助られた。片山清七は、助命哀願した片山主膳の子であったが、主膳は後に家禄没収となり窮乏の極みにあった。清七は猛雄に江戸への旅費の援助を求めたが、その申し出を拒絶すると共に侮辱したため殺害され金品を奪われた。清七は、その場より京へ逃亡したと云われている)の墓がある。また喬松院殿(元彭城家八代で大通事太郎兵衛の妻で、太郎兵衛の死後、長崎奉行松山伊豫守の後妻となり、江戸で一女を産み長崎に帰り実子太次郎兵衛宅で死去した)の墓も在る。

40年(1907)に建てたもので門の扉は、明暦3年(1657)同寺山門創建の時、長崎奉行所立山役所の大門の扉を下賜されものである。山門脇には昭和26年に同6年から25年まで毎日参詣する事で健康になった事を感謝して寄贈された健康観音と長崎四国三十三番霊場の平屋瓦葺がある。山門から続く長い石段を登ると、昭和33年(1958)3月築の石門が在る。正面頭部には、小曾根乾堂の長男である星海の筆になる醫王山の3文字が刻んである。本堂は創建以来数度に渡り建て直されており現本堂は、平成15年(2003)に解体改築されて全体に一新されている。本堂内は正面に本尊薬師如来木座像が在り左右に十二神将と元大徳寺山門にあった日天、月天を配し、本尊の前面には鏡一面を安置してある。他には、元経藏内にあった元禄12年(1699)肥前



国松浦郡に漂着したと伝えられる釋迦如来木座像が左脇間に安置されている。また、右脇間には愛染明王座像と脇立として聖観音菩薩と十二面観音菩薩がある。また内陣右側には旧能仁寺猪ノ子弁財天と同寺伝来の弁財天が安置されている。同寺境内の配置は、大正から昭和初めにかけて編纂された『長崎市史地誌編』にある同寺境内の配置とは大きく異っている。これは平成15年(2003)の本堂改築に伴い、本堂周辺の整理を行った事による。延命寺の特色としては、同寺内に明和2年(1765)に創建され同寺鎮守として祀られていたが、明治4年(1871)他所に移され明治21年(1888)に再建されたと云われている。同寺後山には、文化8年(1808)正月16日夜旧大村藩士片山清七によって殺害された同寺住持権僧正の猛雄(元大村藩士小林宇右衛門で同藩同僚の妻と密通し、その夫に傷を負せて脱藩したが、同藩士片山主膳と延光寺住持の哀願にて仏門に入り、一命を助られた。片山清七は、助命哀願した片山主膳の子であったが、主膳は後に家禄没収となり窮乏の極みにあった。清七は猛雄に江戸への旅費の援助を求めたが、その申し出を拒絶すると共に侮辱したため殺害され金品を奪われた。清七は、その場より京へ逃亡したと云われている)の墓がある。また喬松院殿(元彭城家八代で大通事太郎兵衛の妻で、太郎兵衛の死後、長崎奉行松山伊豫守の後妻となり、江戸で一女を産み長崎に帰り実子太次郎兵衛宅で死去した)の墓も在る。次回は寺町散歩番外編として光永寺とします。次回を以って一旦寺町散歩を終了します。